city&life

都市のしくみとくらし

別冊

Let's Greening

緑で生まれ変わるまちとくらし

第27回（2016年度）緑の環境プラン大賞受賞作品集

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

緑豊かな環境の形成を図ると共に、生活の質の向上やコミュニティの醸成を図ることを目的とした緑化工事助成事業「緑の環境プラン大賞」。

地域の拠点となり得る「シンボル・ガーデン部門」、小規模ながらコミュニティ活性化に寄与する「ポケット・ガーデン部門」と、東京都内限定で、花と緑で観光客を迎えるおもてなし空間の創出を目的とした特別企画「おもてなしの庭」に対して緑化プランを公募、審査によって選ばれた優れたプランを表彰している。

第27回（2016年度）においては、各部門に対し全国から計49点の応募があり、2016年9月に行われた審査会で各賞計14点が決定した。

そこで本誌では、翌2017年の5月から緑化工事助成事業の成果について取材をスタート。緑が地域の景観に潤いを与え、人が集い、つながりを育む拠点となり、コミュニティを育み始めている、その現場を訪ねた。

なお、第27回受賞プランのうち、整備中の一部事例については次回改めて紹介する。また特別企画「おもてなしの庭」についても、今回は、今年度中に整備が完了した第26回（2015年度）の大賞と特別賞を紹介する。

contents

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞	株式会社キャッセン大船渡	「千年広場」プロジェクト	岩手県大船渡市	2
緑化大賞	学校法人ろりぽっぷ学園	いぐねのにわ―ほかならぬ場所―	宮城県仙台市	4
	社会福祉法人敬愛福祉会 敬愛保育園	地域の縁側／MoMOの森	熊本県玉名市	5

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	真言宗豊山派圓乗院	世田谷ポケットナーセリー	東京都世田谷区	6
コミュニティ大賞	NPO法人とめタウンネット	おおあみコミュニティグリーンプロジェクト	宮城県登米市	8
	オープンガーデン・うらやす ガーデントーククラブ	ようこそ! トピアリーの世界へ!	千葉県浦安市	9
	上尾市立東町小学校　おやじの会	地域と育む みどりの学校ファーム&ガーデン	埼玉県上尾市	10
	社会福祉法人育愛会　明日香保育園	天使たちの苑	東京都北区	11
	TOKYO STREET GARDEN	上野桜木・桜縁荘リノベーションプロジェクト	東京都台東区	12
	Joy of Roses	太陽ローズガーデン環境整備	神奈川県横浜市	13
	春江大好きプロジェクト	小児科となりのセラピーガーデン	福井県坂井市	14
	NPO法人地球デザインスクール	ハッチョウトンボのジュル田プロジェクト	京都府宮津市	15

特別企画「おもてなしの庭」

大賞	NPO法人京橋川再生の会	京橋大根河岸おもてなしの庭	東京都中央区	16
特別賞	三菱地所株式会社	ホトリア広場～交流の森～	東京都千代田区	18

国土交通大臣賞

株式会社キャッセン大船渡
自然と共に暮らし共に育つ「千年広場」プロジェクト
岩手県大船渡市

●自分たちの手で草花を植え育てるイベントも行われている

千年後の未来にこの喜びを伝えたい

「キャッセン モール アンド パティオ」は、大船渡市の駅前に立地するショッピングモール。駅前といっても電車は走っておらず、BRTというバスが運行している。

「キャッセン モール アンド パティオ」を運営するのは、(株)キャッセン大船渡というまちづくり会社。今回助成した「千年広場」も同企業が維持管理を行っている。

大船渡は、もともと大船渡港の後背地として発展してきた町。大小の船舶が出入りし、その乗組員たちで町は大いに賑わったという。その記憶があるのか、町は生まれ変わっても、夜中心の賑わいは変わらない。ほとんどの飲食店が24時まで営業し、なかには26時閉店という店もある。「千年広場」も24時までライトアップされている。平日は夜間の利用客が多いが、休日は、逆に日中、利用客で賑わう。とくに家族連れが多く、それにあわせてさまざまなイベントが開催されている。

震災復興後のまちづくりの目標は、1000年後の子孫に向けて受け継ぐ文化をつくること。未来の大船渡を担うのは子どもたちだ。「千年広場」は、市民の憩いのスペースであると同時に、子どもたちの遊び場でもある。ボール遊びをしたりフリスビーをしたり、大道芸の講習会やチアダンスもこの芝生の広場が会場だ。

隣接する親水公園から裸足のままあがり、敷き詰められた芝生の上を裸足で走り回る子どもたち。自然を肌で感じながら成長してほしい。そんな大人たちの願いをうけて、今日も子どもたちは「千年広場」で元気に遊んでいる。

●店舗棟のプランターは移動可能で、緑を自由に演出する

●ベンチや巣箱はみんな住民の手づくり

●花壇の製作や植栽はNPO法人グリーンフィールズと協働で

●週末には野外ライブも行われる芝生広場

●各施設の周囲にも植栽が配され連続性が保たれている

学校法人ろりぽっぷ学園
いぐねのにわ―ほかならぬ場所―

宮城県仙台市

●すでに摘み取られているが、パーゴラにはブドウが植えられた。見るだけでなく、食べて楽しむ庭づくり

●保護者も積極的に参加して、みんなで一緒に野菜づくり

●水のいきものたちの生活を知る。既存のビオトープを改修し、希少メダカ復活プロジェクトも始まった

●木登りや雲梯に夢中になるうちに、庭は大きなプレイスペースに変身

子どもだけでなく大人も一緒に成長していける場

仙台市若林地区の住宅地にあるろりぽっぷ学園。敷地内には、幼稚園（定員178名）・保育園（同90名）・小規模保育施設（同19名）に学童保育室と子育て支援室があり、延べ400名以上の子どもたちが通っている。

応募のテーマは「いぐねのにわ」。「いぐね」とは、家屋敷を風雪から守るために、敷地を取り囲むように植えられた防風林のこと。かつては東北沿岸部でよくみられたが、宅地開発で減少し、わずかに残った「いぐね」も、東日本大震災で壊滅的打撃を受けた。同園では、応募するにあたり、この「いぐね」を庭として復活させ、将来にわたって残していくことを目指した。

かつての「いぐね」には、針葉樹ばかりでなく、柿、栗、梅、柚などの木々が植えられ、季節になれば、その果実を食し、また、木は家を建て替える際の材木として使われていた。そこで、同園の「いぐね」にも柿やぶどうが植えられ、園児たちは、それらの果実を自由に取って食べられるようにしているという。また、併設された畑の収穫物と共に、園児や保護者、地域の住民が一緒になって楽しむ食事会なども開かれている。

「いぐね」は、園児や保護者にとっては、遊び場となるだけでなく、地域文化や風習を経験できる貴重な場でもあるのだ。同園では、地域のお年寄りがボランティアとして活躍しているが、これも、同賞応募がきっかけだった。今後「いぐねのにわ」を通じて、大人も子どもも一緒に成長していく場となることが期待される。

社会福祉法人敬愛福祉会 敬愛保育園
地域の縁側／MoMOの森

熊本県玉名市

●敬愛保育園の前庭も兼ねる「地域の縁側／MoMOの森」。子どもたちがじょうろで遊ぶ水飲み場は、左官によって造作された作品でもある

●「MoMOの森」の名称は、ミヒャエル・エンデの童話「モモ」から名づけられた

●石の上に並べられた色とりどりの葉っぱ。子どもたちによるアート作品

●沿道との境界に設けられた石はベンチを兼ねる。まさに「地域の縁側」に

多世代交流の拠点として

2016年4月、最大震度7に及ぶ地震に2度見舞われた熊本県。ここ玉名市内でも震度6弱が記録されている。「地域の縁側／MoMOの森」は熊本地震を受け、「いざという時、地域住民の避難所としても利用できる場所にしたい」との意向で整備された。

事業主体は社会福祉法人敬愛福祉会。もともとは同法人が運営する敬愛保育園前の広場として、フェンスで囲う計画だったがこれを見直し、「誰もが、いつでも訪れて、ひと時を過ごせる緑の空間にしました」と、同法人理事長の小岱紫明（しょうだいしめい）さんは言う。

緑地内には、コナラやクヌギなど、どんぐりができる木を中心に、葉の形がキレイで紅葉もする落葉樹、可憐な花をつける草木が配され、庭園としての美しさと共に、子どもの興味を引くような植栽がなされている。また、森のなかの芝生は園児も一緒に張ったそうだ。

沿道との境界には大小の石が配されているが、これは、通りがかった人がちょっと腰掛けて休めるベンチを兼ねている。小岱さんによれば、「地域のお年寄りが散歩途中に立ち寄って、この石のベンチで休み、森の中で遊ぶ園児と仲良くなっていますよ」とのこと。「地域の縁側」としても十分機能し始めている。

今後は保育園の活動を中心に、さらに地域の人々が交流できる機会として、食を通じたイベントを開催していく計画もあるという。緑の成長と共に、地域の人々の交流も、豊かに育っていくに違いない。

国土交通大臣賞

真言宗豊山派圓乗院
世田谷ポケットナーセリー
東京都世田谷区

●パーゴラがつくる緑陰の心地よさを実感。左から青島さん、大野さん、清水さん

地域のつながりを育む「ナーセリー（苗木場）」

緑化に取り組んだきっかけは、空き家活用からだった。「当初は、住宅のみの活用を考えていました。ですが、この辺りの緑はほとんど私有地のもので、公共の緑地がありませんでした。そこで空き家の庭を、地域に開かれた空間として開放することにしたんです」と語るのは建築家の青島充さんだ。空き家オーナーの清水宥聖さんのお嬢さんと同級生だったことから相談を受け、今回の計画を立案。タッグを組んだ大野暁彦さんも同級生で、こちらはランドスケープの専門家だ。

宅地を囲っていたブロック塀を取り除き、既存の庭木だったサルスベリやツゲを敷地奥に移植、開かれた空間をつくった。道路沿いにはパーゴラを設置し緑陰を形成。その下には路面から少し高くなるよう盛り土をして芝生を張り、ベンチのようにしつらえた。なお、壊した塀などの廃材は粉砕し、盛り土の下などに敷き詰めて、極力ゴミを出さない工夫も行ったという。

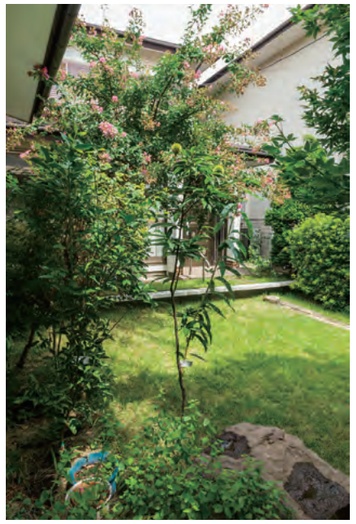
「地域の緑の質を高めるため、在来種による植生を重視しています。鉢で育てている苗も、近くの寺や神社で拾ってきた木の実です」と大野さん。

空き家はシェアオフィスとしての活用を検討中だが、体制が整っていないため完全に庭を開放するには至っていない。それでも、これまでの整備も可能な限り自分たちで行ったため、この間に近隣住民との交流が育まれ、散歩がてらに寄ってくれる人もいるそうだ。今後の展開に、大いに期待したい。

●パーゴラエリアは地域の交流拠点になることを願い、誰もがほっと一息つけるような場所として整備

●庭は、小さな子どもも寝転がって遊べるような、芝生のコミュニティ広場に

●近隣の子どもたちへの環境教育の場にもなるよう、在来の植物を植栽、栽培している



●住宅に関しては、青島さん、大野さんら数名で「空き家活用研究会」を結成。シェアオフィスとしての活用などを検討中だ

NPO法人とめタウンネット
おおあみコミュニティグリーンプロジェクト

宮城県登米市

●商業施設とコミュニティスペースが広いウッドデッキでつながっている

●正面道路側と連続性をもたせた植栽。遮蔽用の木製の垣根は、住民参加でつくられた

●花屋さんに並べられた花も、緑の環境を形成する大事なアイテムだ

緑をキーにして地域活性化をはかる

「アルテラスおおあみ」は、宮城県登米市迫町の大網地区にある民設民営のコミュニティ支援拠点だ。約300坪の敷地に、2階建て3棟とそれらをつなぐ庭で構成されている。商業施設の他に登米市が設置する「登米市民活動プラザ」が入居しており、市民活動団体やNPOが頻繁に利用している。

運営するのはNPO法人とめタウンネット。地元の雇用創出などを目的に設立されたが、仮設住宅、復興住宅に住む住民と地元住民とのコミュニティづくりや地域活性化のための人材育成にも積極的に取り組んでいる。

施設内と施設に隣接する道路の芝張りと木々の植栽整備を目的に「ポケット・ガーデン部門」へ応募したが、予想以上にクルマの往来が多く芝生が根づかず、思い切って道路側は砂利に変更。造園屋さんに相談して、その分緑の量を増やし、それに合わせて助成応募時には計画になかったパーゴラやウッドデッキ、木製の塀などを自前で設置した。

ウッドデッキ上には、色とりどりの鉢植えが並んでいる。じつは、これらは1階店舗の生花店の商品。ウッドデッキを増設したことで、建物同士がゆるやかにつながり、思わぬ相乗効果が生まれているという。

「アルテラスおおあみ」の裏には、復興住宅が建ち並ぶ。そこに暮らす避難住民も最近は足繁く通うようになり、地元住民との交流も活発になってきた。「とめタウンネット」の理事長で、すぐそばでガソリンスタンドを経営する及川幾雄さんは「緑の効果は絶大」という。緑をキーにした地域活性化の好事例といえるだろう。

オープンガーデン・うらやす ガーデントーククラブ
ようこそ! トピアリーの世界へ!

千葉県浦安市

●見て楽しい、触れて楽しいがコンセプト。子どもたちも一緒になって庭づくり

●浦安を花と緑でいっぱいの町に。トピアリーのうさぎと一緒にガーデントーククラブのみなさん

●キンメツゲを刈り込めば、いつのまにか動物や人のかたちに。愉快で楽しいトピアリーの世界

「眺める」だけの緑から「触れ合う」緑へ

浦安市役所入り口付近にひときわ目を引くうさぎのトピアリーがある。トピアリーとは、植物を刈り込んでつくる立体造形物。キンメツゲを刈り込んでつくられたうさぎの姿は、どことなくユーモアがあり、周囲の花々との相性もいい。

このトピアリーを中心に、庭づくりをしたのが、オープンガーデン・うらやすガーデントーククラブだ。代表の城戸夫巳枝さんが自宅の庭を公開する「オープンガーデン」を始めたのは2002年。2007年には、ガーデニング仲間とオープンガーデンを行う団体「ガーデントーククラブ」を立ち上げた。

旧市役所の植栽用コンテナが雑草だらけで、ゴミが捨てられているのを見た城戸さんは、「これはなんとかしなければ」と浦安市に申し出たのがきっかけで、旧市役所内の花壇の手入れを担うようになった。以来花を植え、育てる活動を続けてきたが、2016年市役所新庁舎が完成したのを機に、市から新たに新庁舎に花壇をつくってほしいという依頼を受けた。

コミュニティ大賞の助成金と市の委託金で花壇づくりが始まった。チューリップやシクラメンなど約200種の花を植えた他、うさぎや子どもをかたどったトピアリーをつくり、約6ヵ月かけて完成させた。

花壇のコンセプトは、「眺める」から「触れ合う」へ。水やりをしたり、手入れをしたり、もっと花とかかわりをもってほしいと城戸さんは言う。オープンガーデンのアイデアは、城戸さんのなかで今もどんどん涌いている。

上尾市立東町小学校 おやじの会
自然の中で元気に学ぶ あずまっ子!
地域と育む みどりの学校ファーム&ガーデン

埼玉県上尾市

●一昨年まで草ぼうぼうだった校舎裏。今ではこんなにステキな花壇に生まれ変わった

●紅葉が美しいコキアをシンボルに。スケッチや昆虫観察にくる子どもたちも

●おやじの会を中心に子どもたちやお母さんたちも花壇づくりに参加した

子どもたちが草花と触れ合える「緑のガーデン」

東町小学校の父兄の有志によって結成された「おやじの会」は、これまでも学校行事や地域のイベントにボランティアとして積極的にかかわってきた。学校内には畑があり、おやじの会はそこでサツマイモの栽培などを手がけていた。

応募のきっかけは、畑の隣の土地を四季折々の草花と触れ合える「緑のガーデン」にして、子どもたちに提供したいというおやじたちの思いからだ。当時学校の裏側に放置されたままの土地があった。思いがけず、助成が決定。この土地を利用して、ガーデンづくりが始まった。もともと土地そのものが痩せていたため、土地の開墾から始めなければならなかったという。

たまたま東町小学校の卒業生に造園のプロがいて、まず、彼女から庭づくりの手ほどきを受けた。コンクリート打ちや石積みなどの土木工事を手始めに、土づくりや花の植え方、肥料のつくり方などを学びつつ、実践していった。

おやじの会が中心ではあったが、庭づくりには、お母さん方や子どもたちも加わった。卒業式までには間にあわせたいと思い、毎週土曜日は庭づくりの日と決めて取り組んだ。その甲斐あって、卒業式までに完成。

ガーデンの前で式を終えた卒業生が、保護者らと記念写真を撮る様子を見て、感無量だったとおやじの会の渡部正美さん述懐する。

外の道路からも良く見える「緑のガーデン」。今後は、小学校とも相談し、地域に公開する機会を増やしていきたいと渡部さんたちは考えている。

社会福祉法人育愛会 明日香保育園
天使たちの苑

東京都北区

●園児の登園口にある花壇のなかには、小さなビオトープをつくった。メダカの様子を眺めるのが、子どもたちの朝の日課

●味気ない鉄製フェンスのうえに木製ラティスを設置、ハンギングバスケットに色とりどりの花を植えて、保育園らしい楽しいイメージを演出

●木製遊具から砂場にかけて、ゴーヤのカーテンを設置

●畑で大きく葉を広げていた里芋を子どもたちと一緒に収穫

●遊歩道から園庭への入口。アーチには今後モッコウバラを這わせる予定

緑を通じて地域と交流する保育園

北欧で子どもの家としてつくられる「レイキモッキ」をモデルにした木製遊具が園庭に設置された明日香保育園。園児の保育においても、北欧の自然に学ぶ幼児教育「ムッレ保育」を取り入れているという。「自然体験を通じて子どもたちが学ぶことは本当に大きいんです」と語るのは、園長の竹内久美子さんだ。

都内の保育園であるだけに、園庭はそれほど広くない。それでも園庭には畑をつくり、夏野菜を始め大根や里芋なども育てている。そして今回の助成では、ゴーヤによる日よけやミカンなどの果樹の導入、またビオトープもつくり、昆虫や鳥が訪れる環境をつくりだした。さらに、地域の人々が気軽に立ち寄れる、コミュニティスポットとしての整備も行っている。

「園庭の北側は遊歩道になっています。そこに花のアーチを設け、地域の方々の入口に。畑の前にはベンチを置いたので、ここで自然を満喫しつつ、園児の姿を見ながら、くつろぎのひと時を得ていただきたいと思っています」と竹内さん。なお、遊歩道側の入口は竹内さんが在園しているか、職員が対応できる時間のみオープンにし、園児の安全に配慮している。

ただ、「まだ認知度が低いので、散歩中の方に私たちがお声がけをして、庭を見ていただいています」とのこと。今は少々敷居が高いが、声をかけると喜んでくれる人が多いそうだ。今後はイベントも開催し、地域との交流にいっそう力を注いでいく予定だという。

TOKYO STREET GARDEN
上野桜木・桜縁荘リノベーションプロジェクト

東京都台東区

●縁台が置かれた庭先は市民の交流スペース。
イベントやワークショップが行われている

●老朽化したブロック塀を生垣に改修し、灯篭などを活かして和風の庭を演出

●放置されていた石を敷石に再利用。
路地空間をつくりだす

地域の園芸文化を読み解き、まちづくりに活かす

桜縁荘は、寛永寺のお膝元上野桜木にある築100年の木造2階建て家屋。近隣には、上野公園や東京藝術大学がある。

建築当初は隣りの言問通り沿いの豆腐店「藤屋」の持ち家だったそうだが、その後何人かの手に移り、ここ6年ほどは借り手がつかず、空き家状態が続いていた。2014年にオランダのアーティストグループの滞在を機に、建物を修復、再生するワークショップが開催され、その流れで、昨今は、地域コミュニティの拠点として利用されていた。

家屋自体の改修が徐々に進むなかで、庭については放置されるままになっていた。また、ブロック塀も老朽化し倒壊の危険性も指摘されていた。

地域における路上園芸文化に着目し、独自の視点からまちづくりを行ってきたTOKYO STREET GARDENは、桜縁荘を園芸文化をベースとした地域交流サロンとしてリノベーションするというプランを発案する。

屋外空間を有効活用すべく、庭に注目し、ワークショップを活用しながら、市民参加型で庭のリノベーションを行おうというものだ。

まず、ブロック塀を生垣に改修。この地域に特徴的な低木・地被植物を植える。植木鉢を設置できる棚を造作し、植木を置く。また、ベンチ、スツール、テーブルを設置し、屋外空間を交流スペースとして活用する方法を提案した。

地域の園芸文化を読み解き、それをベースに町を再生する。桜縁荘リノベーションプロジェクトは、緑を軸にした新たなまちづくりを予感させる試みだ。

Joy of Roses
太陽ローズガーデン環境整備

神奈川県横浜市

●今まで通路と花壇の仕切りに使っていた古い枕木や花壇土留め用の丸太が腐食してきたため、今回の助成を使い、プラスチック擬木の土留めに刷新した

●バラがもっとも美しい5月に毎年開催されている「太陽ローズガーデン・フェスティバル」。手づくりグッズやバラグッズの販売、クイズが人気で、例年3000人／日を超える人々が訪れているという

●プレートに「My Rose」と記されたものがオーナー制度によって購入されたバラの苗

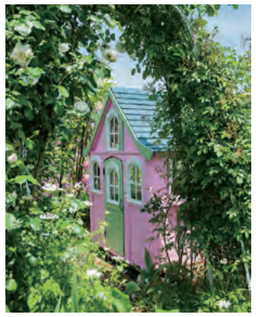
住民自ら整備した県内有数のバラ園

5月にしては肌寒い日曜日、「これくらいの気温の方が、バラの見頃が長く続きます」と笑顔で言うのは「Joy of Roses（以下JOR）」副会長の増田健一さんだ。この日は「太陽ローズガーデン・フェスティバル」当日。朝から大勢の人々が訪れ、咲き誇るバラの花を鑑賞し、あたりに満ちた馥郁たる香りを楽しんでいる。

今や、県内有数のバラの名所として知られる「太陽ローズガーデン」だが、本来は横浜市管轄の公園だ。周囲の宅地開発にあわせて開園したが、利用者も少なく雑草が生い茂る状態に。見かねた地元のバラ愛好家グループJORと住民有志が2001年、市の許可を得て花壇の造成に着手。持ち寄った25株のバラを植え、その後の管理も担うことになる。また、園内のバラを増やす仕組みとして、バラ苗の費用と管理費を寄付するオーナー制度「My Rose」をスタート。すると希望者が続々と現れ、今や園内のバラは230株まで増えている。JOR会長の赤澤増男さんは「バラが増えるに従い、地域の方々の関心も高まり、今や、地域の誇りにもなっていると感じます」と笑顔で教えてくれる。

今回の助成では、古くなってしまった通路との仕切りや花壇の土留めを刷新、バラの苗も15株ほど増やした。わが町の公園を、住民自らの手で蘇らせ、地域内外の人々をも惹きつけるバラ園に成長した「太陽ローズガーデン」。これからも地域の人々の誇りとして、愛され続けていくだろう。

春江大好きプロジェクト
小児科となりのセラピーガーデン
福井県坂井市



●庭園内には「白雪姫」や「不思議の国のアリス」などをテーマにした一角も。可愛らしいチャイルドハウスを新たに導入

●毎年5月には「セラピーガーデンデイ」が開催されている。ハーブの演奏や手づくりスイーツを楽しみに、多くの人々が訪れる

●色とりどりのバラが咲き誇る「小児科となりのセラピーガーデン」入口

地域の人と人をつなぐ「美しい庭」

晴天の5月、その庭には、色とりどりの蔓バラを中心に、ラベンダーやデイジー、オルレヤが咲き誇り、まるで、おとぎ話の世界に迷い込んだかのようだ。

「バラだけで100種類ほど。チェリーセージやカモミールなど、ハーブも多く植えてあるので、庭を歩くと良い香りがするでしょう」。笑顔でそう教えてくれるのは、「春江大好きプロジェクト」代表の木川直美さんだ。同団体ではこれまでにも、地域の魅力づくりに貢献する活動を多数企画・運営してきた。この庭もその一つ。24時間オープンで、誰でも、いつでも、ここに来て、ひと時を過ごすことができる。

「隣接する小児科へ来る子どもたちは、帰りに必ずこの庭に寄って、一角に設けられている砂場で遊び、ハーブの良い香りに包まれて、注射の辛さや薬の苦さを忘れて帰ります」と木川さん。もちろん子どもたちだけではなく、近くのショッピングセンターでの買い物ついでに立ち寄る人や、定期的に訪れ、写真を撮ったり、絵を描いたりしている人も多いという。さらに、「ここを拠点に、新しいお友だち関係や趣味のコミュニティも誕生しています」とのこと。美しい庭がある。それだけで、人と人とのつながりが生まれている。

今回の助成では、バラやハーブ、シャクナゲなどの植物の他、チャイルドハウスを導入して園内の設備を充実させた。今後はいっそう、その「美しさ」によって、地域に元気と潤いを与える庭になっていくはずだ。

NPO法人地球デザインスクール
こどもの森ハッチョウトンボのジュル田プロジェクト
京都府宮津市

●公園のある地域は、環境省の「重要里地里山500選」に選定されている

●ハッチョウトンボは5月～9月にかけて湿地周辺で観察できる。親子で一緒に探し発見の喜びを共有する

●日本で一番小さく、世界でも最小クラスのトンボと言われている

●小さな水車を設置し、水辺の親近感を創出。水車は地域のシニアグループの手づくり

共生のシンボル・ハッチョウトンボの生育環境を保全

「京都府立 丹後海と星の見える丘公園」は京都府北部の丹後半島に位置する。公園は海のそばにある小高い丘で、元は地域の里山だった。若狭湾や里の風景が見渡せる展望が魅力で、ゆったりと自然を満喫することができる場所だ。

公園の最大の魅力はその多様な自然環境にある。豊かな漁場を守り育むために魚付保安林に指定されている場所もある他、森も人も生き生きとできる空間を目指し、来園者と共に森づくりをしている。動植物との共生を知り、森林の生態系を肌で感じることができるとあって、環境教育のフィールドとして、今、注目されているのだ。

公園の指定管理者であるNPO法人地球デザインスクールは、園内にハッチョウトンボの生息する湿地があることに着目し、ビオトープ修景プランが当大賞の助成を受けた。京都府登録天然記念物・ハッチョウトンボは生息できる条件が限られていることで知られている。水が絶え間なく流れながら、常に水深2～3㎝が保たれていること。さらに20㎝程度の草が生えていることも必要だ。

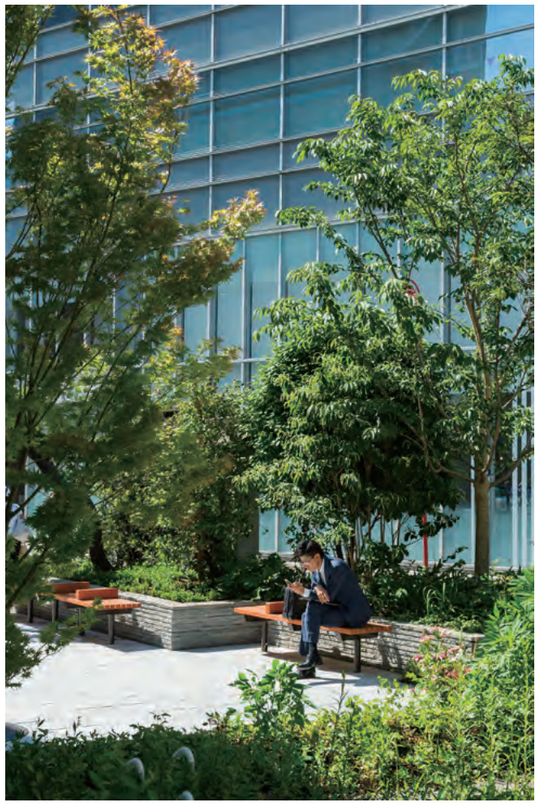
湿地は雨や土砂などの影響で畦が崩壊しかけていた。また、来園者が間近でハッチョウトンボを観察できる場所も限られていた。そこで、畦を補修し水路を整備、調査や観察ができる観察路を増設し、ハッチョウトンボの生息地を保ち、来園者に人と自然の共生をより伝えられる場所となった。生息地を維持するためには日頃の草抜きや泥かきが欠かせない。今回の修景プランは環境保全を環境教育に取り入れているところが高く評価された。

※第26回（2015年）緑の環境デザイン賞にて本賞を受賞

NPO法人京橋川再生の会
京橋大根河岸おもてなしの庭

東京都中央区

●整備工事の際に発掘された京橋川の護岸。
一部を保存・公開している



●ベンチを配し、サラリーマンが気軽に立ち寄れる広場に

露地をつくり、茶花を配す。新たな「都市の庭」

NPO法人京橋川再生の会は、京橋地区の地域活性化を目指す団体。シンポジウムの開催、また「京橋川カフェ」による江戸野菜の紹介や月見の会、野点を催し、地域社会と一体となった活動を展開してきた。

今回助成を受けた「おもてなしの庭」は、京橋大根河岸跡地広場の歴史的役割を継承し、江戸文化発祥の地として位置付け直し、「和の文化」を発信しようというもの。江戸初期に開かれ、下町の中心軸であった中央通りと、1964年のオリンピック開催時に埋め立てられた京橋川が交差する橋詰広場として、当該地は大いに賑わったといわれている。名前の由来は、江戸時代にこの場所で野菜の荷揚げが行われ、なかでも大根の流通量が一番多かったからだそうだ。近年は、銀座と日本橋の中間として買い物客やサラリーマンが気軽に立ち寄れるスポットとなっているが、喫煙スペースや休憩所としての利用が目立ち、場所のもつ歴史性は薄かった。

そこで、奥行きのある立地を活かし、思い切って露地をつくり、茶花を配して、緑豊かな「和の空間」にしつらえた。入り口には保存された京橋の欄干を置き、露地を進めば、蹲（つくばい）やかけひが客人を迎えてくれる。

その狭い空間が、かえって日本的情緒を醸し出す。あえて舗装は自然石にして、道路との境にはオオシマザクラやカンピザクラ、イロハモミジといった日本の象徴である木々を植栽した。茶庭の伝統を現代に蘇らせた都市の庭。海外からの観光客にも大いにアピールすることだろう。

●京橋大根河岸の石碑の前に並ぶ
NPO法人京橋川再生の会のみなさん

●かけひや玉砂利を敷き詰めて、
茶亭の雰囲気を醸し出す

●細長い立地を露地に見立てて、和の空間を表現

●手前に茶花を低く配し、奥に高木を植える。
奥行き感を創出する巧みな演出

特別賞

※第26回（2015年）緑の環境デザイン賞にて本賞を受賞

三菱地所株式会社
ホトリア広場～交流の森～
東京都千代田区

●皇居の植栽と呼応するようにクスノキやクヌギが植えられている

人・環境・生物をつなぐ「交流の森」

ホトリア広場は、皇居エリアと東京駅エリアの結節点で、通称「大丸有」（大手町・丸の内・有楽町）と呼ばれるエリアにある大手門近くに立地する。大手門タワー・JXビル敷地内と大手町パークビルディング敷地内に位置し、今回助成対象となったのは、大手町パークビルディング敷地内の600㎡。プランのコンセプトは、人・環境・生物をつなぐ「交流の森」。水と緑豊かな憩いの広場の創出、環境・生物多様性への配慮、コミュニティ活動による地域活性化が目的だ。

実際にホトリア広場を歩いてみた。内堀通り側には、大手濠石垣上や内堀通り街路樹常緑樹植栽と呼応するように高さ15mのクスノキが列植されていた。またその内側には、皇居の二の丸雑木林を意識した、在来種・地域種を主体とする林がつくられ、低木地被も皇居二の丸雑木林の林床でも確認される在来種をもとに構成されていたのが印象的だった。

植栽地にアンジュレーション（地表面の起伏）を設け、緑による「包まれ感」を高めることで、店舗から内堀通りのクルマへの視線を遮断するといったテクニックが使われており、水と緑豊かな憩いの広場の創出という目的は、果たせていたように思われる。

生物の生息に配慮した多孔質の石積みや巣箱の設置は、環境・生物多様性への配慮からであろうし、通路に透水性舗装を施し、ドライミストを設置して気温を低下させるといった細かな心づかいを感じられた。

皇居と隣接する稀有な場所に、人や鳥やチョウが集い憩うおもてなしの空間が誕生した意味は大きい。

●高さ3mのポール式のドライミスト。
午後からの日差しを受けるコミュニティ空間周辺に配置されている

●多孔質の石積みが施され自然景観を印象付ける

●皇居二の丸雑木林を意識した、ケヤキ、クヌギ、コナラ中心の植栽

●通りの内側では都心とは思えない憩の空間が広がり、散策やコミュニケーションに適したスペースが点在する

●内堀通り沿いに水路を設け、水と緑の空間を演出

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国を対象	地域のシンボル的な緑地として、緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果などを取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成及び地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ緑地のプランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国を対象	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育、身近な環境の改善に寄与するアイデアを盛り込んだ花や緑のプランを募集します。
特別企画 「おもてなしの庭」	東京都限定	2020年に向けた特別企画として、花と緑で観光客をお迎えする魅力ある緑の創出、及びその場所でのおもてなしの活動に関するアイデアを盛り込んだプランを東京都内限定で募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞1,000万円以内（助成金）
	緑化大賞	2点以内	副賞1,000万円以内（助成金）
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞100万円以内（助成金）
	コミュニティ大賞	9点以内	副賞100万円以内（助成金）
特別企画「おもてなしの庭」	大賞	1点程度	副賞2,020万円以内（助成金）

審査委員

委員長	進士五十八（福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授）
委員	金子忠一（東京農業大学教授） 栗田卓也（国土交通省都市局長） 永山妙子（マネジメントコンサルタント） 藤沢久美（シンクタンク・ソフィアバンク代表） 松本肇（株式会社産業経済新聞社取締役営業・事業担当） 村上暁信（筑波大学システム情報系教授） 渡邉光一郎（第一生命保険株式会社代表取締役社長） 小野文夫（一般社団法人第一生命財団常務理事） 宮下和正（公益財団法人都市緑化機構専務理事）

※役職は2016年審査会当時

スケジュール

募集期間	2016年4月1日～6月30日
審査会	2016年9月15日
入選発表	2016年10月17日
表彰式	2016年11月11日 於:明治記念館

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、第一生命保険株式会社、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、東京都（おもてなしの庭）
協賛	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、都市緑化基金等連絡協議会
協力	株式会社フジテレビジョン、株式会社産業経済新聞社、株式会社ニッポン放送

city&life 別冊

2018年2月28日発行

発行者　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社 アルシーヴ社
斎藤夕子

撮影　坂本政十賜

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社 恒陽社印刷所

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city life 別冊